

あかしん

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作・
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

元氣のでてくる「ことばたち」

156

村上信夫

(アナウンサー)



Nobuo Murakami

憶力の鍛錬にもなるからだ。話しかける自分のところに、死んだ人々が、時間を飛び越えてやってくる。死んだ人と一緒にいるような気持ちになれる。名前を言っ

させてしまう戦争というものの「悪」を、身をもつて感じた。一方で、「俺は何で助かったのか」との気持ちも残った。1年3カ月の抑留生活の後、引き揚げ船で帰国する時に、心は決まっていた。これまで人のために何もして来なかった。せめて「非業の死者たち」に報いるために生きたい。『水脈(みお)

大地とつながるために生きる

『生き物感覚』という言葉をよく使う。生の人間の「いのち」を徹底的に大切にする発想だ。秩父山地の産土で育った。「兵隊さんごっこ」に明け暮れ、林の中を走り回って、よく漆にかけて(かぶれて)いた。小用で手が触れるので「男根」が腫れあがってラップのようになる。顔も腫れあがる。そんな時、叔母が「漆と結婚すれば治る」と言った。冷酒を漆の木にかけて、「おめえも飲め！」と舐めさせられた。叔母は「これで、おめえは漆の木と結婚した、夫婦になったんだ」「もうかせる事はない」と云った。本当に全く「かせる」ことはなくなった。自分自身「樹木信仰」が育っていったキツカケだと思ふ。自分の中の「あらゆる生き物への信仰に近い親しみ」は、子ども時代に養われている。人間と動物の区別などない「生き物に対する本能的な姿勢」がある。

■村上信夫プロフィール
NHK エグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元氣のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

抱き合えば、物に即せる

俳人 金子兜太さん

俳人の金子兜太さんは、先月、92歳になつたばかりだ。全国に弟子が1000人。新聞の俳句投稿欄に毎週6000句投稿される句に全て目を通し選句している。週に3回は、東京や地方へ出かけ、講演や講座、句会にと大忙しという俳句界の巨人だ。巨人は、92歳の心境を「今生きて 老い思はずと 去年今年(こぞことし)」と詠む。

何のために生きるのか

それにしても「兜太」。太い兜とは、すごい名前だ。あごの骨ががっしり張り、まさに兜に相応しい顔立ち。野太い声の迫力がすごい。でもお茶目なのだ。俳句教室のご婦人方に人気なのがうなづける。

元氣の秘訣は、ありのままに、本音で生きていくことだ。毎朝、1日100回のスクワット。腹周りの乾布摩擦。肩回し20回、首回しもする。ご本人曰く「立禅」という儀式もある。立ったまま、30分ほど瞑想する。5年前に亡くなった愛妻をはじめ、130人くらいの亡くなった人々の名前を思い浮かべながら語りかけるのだ。名前を思い出す順番を決めている。記

ていると、その人が生きてるように思える。心を正し、初心に帰る。この「立禅」の出来いかんで、その日一日が左右される。後悔ばかりの人生だが、その人の面影で正されるような気がする。ひとときの思いで語りかけるのが战友たちだ。太平洋戦争で徴兵された金子さんは、南方戦線トラック島で海軍主計中尉として「敗戦」を迎えた。東京帝大を出て、日本銀行に就職したが、わずか3日勤めただけで、1944(昭和19)年、トラック島に施設部隊として赴いた。しかし補給路を失い食糧を断られた。餓死していく者や銃弾に当たり戦死する者も目の当たりにした。

この「悲惨」な体験が、戦後の生き方の原点、自分の出発点だと思つている。多くの仲間たちの「非業の死」を見た。同時に、「死」を力づくで実現

の果 炎天の墓標を 置きて去る』は、人生の転機となった句だ。人は死ぬなら、自然に死ななくてはならない。今回の地震でも、尊厳を奪われ、理不尽な死があった。地球のなせる業と諦めていいのか。地震や津波で人が亡くならない方法を考えねばならないと思う。



俳画/イネ・セイミ

僕のも、俳句が趣味だった。毎年、正月元日になると「元日や 餅で押し出す 去年糞」と言っていたのが、子ども心に忘れられない。そうしたら、それは金子さんのお父さんの句であることが、今回判明した。田舎の開業医だった親父は、とにかく「放屁」が好きで、のべつまくなしだった。特に父に勧められたのは「野糞」。金子さんの父は、人里離れた山の上まで、よく往診をしていた。村人は御礼に、芋やトウモロコシを焼いてくれた。散々喰って帰途につく途中では、決まって「野糞」。「月を眺めながらやるのが、なんともいえねえ」「これくらい悠々としてなけりや、男はだ

めだ」と偉そうに説教していたという。これも大地とつながる生き物感覚だ。

「俳句は、相手と抱き合えば、いい句になる」と言う。物に即するには、離れていてはダメだ。即物とは、相手と抱き合うことだ。生き物感覚は、即物によって得られる。生き物感覚があるから、物に即することが出来る。自分の利益になるよう、相手を改造してしまおうという「対物姿勢」では、生き物感覚は感じられない。

古来もついていた自然への畏敬を忘れ、欧米的な対物思想に支配されてはいけない。人間も地球も生き物。この世界は、様々な生き物が寄り集まって出来ている。地球も生き物ということを知ると、今回のようなことになってしまおうと、巨人は五七五を通して、警鐘を鳴らす。インタビュを終えて、巨人にハグを求めた。

巨人は、おおらかに応じてくれた。なぜか、涙が出た。「安心」に包まれていような気がした。

ラジオが好き!
村上信夫
好評発売中



イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

ところ 常滑屋
とき 月一回 第二・第四金曜日
午後一時~三時
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三五)〇四七〇

大人でも上達する!
フルート教室
入会受付中!!
講師 イネ・セイミ
何か始めたいと思つている貴女。数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

ほりお教授の紀行文学シリーズ ロマンチック沖縄旅物語(連載 第六回)

イリオモテヤマネコ会見録

堀尾 幸平

その朝、沖縄・那覇港は、大、小さきさまざまな船が往来し、港全体が生きもののように活気づいていた。

ぼくは沖縄本島で二週間ほどに三、四本の原稿の執筆を終えて、これからは全くのプライベートで、二三日の沖縄離島めぐりの旅を楽しもうと思っていた。

ぼくは、早朝からかなり長い時間、どの船に乗ろうか、迷った。切符はまだ買ってはいないので、どの船に乗るか、というよりどこに行きに乗るかを決めかねていた。

そんなぼくの横で、先ほどからひとりの少年がぼくと同じように船の行き来をながめていた。

「おじさん…」

少年は、たまたまぼくと目が合うと人なつこくぼくに近寄ってきた。

「おじさん、ヤマネコに会ったことあります?」

「あの、イリオモテヤマネコ?」

「そうです。イリオモテヤマネコです。」

「写真ならあるけど、実物は見たことないなあ。」

「ぼく、今から西表島へ行くんです。」

「へーえ。直接イリオモテヤマネコを見に行くなんて、すごいじゃないか。」

「おじさん、言わせてもらおうけど、ヤマネコを「見」に行くんじゃないって、「会い」に行くんです。「見る」なんて、ヤマネコに失礼ですよ。」

少年は、真剣な表情で、口をどがらせた。

「まったくその通りだ。「見る」ではなくて、「会う」でなくてはならない。」

「ぼくは、少年の発想をおもしろく思っ、その場で、すぐに「西表島」に決めてしまった。」

すると間もなく西表島行きの観光船が入ってきたので、ぼくは、あわてて、切符を買って乗場に走った。

船内は意外に広く幾組かの家族連れでにぎわっていた。

ぼくは、甲板の後尾に立って、次第に離れて行く那覇港をぼんやりと眺めていた。

船尾スクリーナーから激しくはき出される白い泡沫を見つめていると、急に新たな旅情が湧いてきて、年がらなく胸が高鳴った。

「おじさん、西表島に行くんですか?」

先ほどの少年が近寄ってきて、声をかけた。

「そうだよ。おじさんも西表島に決めた。」

「おじさん、西表島に何しに行くんですか?」

「そりゃあ、決まってるさ。イリオモテヤマネコに会いに行くんだ。」

少年は満足そうに、にっこり笑った。

「じゃあ、一緒ですね。「旅は道連れ」って言いますから、よろしくお願ひします。」

少年は、人なつこく笑って、ペコッと頭を下げた。

吉田海里(よしだ・かいり)。平成八年生まれの、中学三年生。

「ぼく、どこなめの出身です。」

「あの、中部空港セントレアのある常滑市?」

ぼくはびびりくりした。愛知県の「常滑」の原稿をぼくは現在も時々書いてるし、それにぼく自身が青春時代に憧れた何人かの少女たちが住んでいた、あるいはいまも暮らしている、ぼくの憧れの街でもあるのだ。

「そうか、海里くんは常滑の出身なのか?」

「おじさん、常滑を知ってるの?」

「もちろん。「あかい新聞」ってあるじゃない?」

「あるよ。ぼく「あかい新聞」に小

学生の時「動物」の作文が載ったよ。」

「それは、すごい!」

ぼくは、急に少年に親しみと愛着を感じた。

海里少年は、家庭の事情があつて、現在は、宮崎県のM養育院で生活をしている。そこで知り合った焼そば屋の「おばあちゃん」にいろいろ世話になってる。そして正月など泊まりがけで遊びに行くようになり、大勢の親せきの人たちとも親しくしてもらっている。

その大好きなおばあちゃんが、動物好きの海里のために、沖縄への旅行をプレゼントしてくれたのである。

この少年のできすぎたと思える話を聞いて、ぼくは、少し心配になつて宮崎の焼そば屋のおばあちゃんに所へ一応、電話をかけてみた。すぐに元気のいい、声の大きなおばあちゃんが出た。

「はい。海里くんは、まじめな子なので、信用しています。安心しておられます。ですが、何分にも初めてのひとり旅です。何かとお世話になると思いますが、よろしくお願ひします。」

「おじさん、常滑を知ってるの?」

る亜熱帯原生林におおわれている。村落には、石垣と防風目的の福木で囲まれた屋敷が多く、素焼の赤がわらを漆喰で固めた屋根が点在している。

島内のいたるところに真赤な花を咲かせているハイビスカスや気根を垂らしたガジュマルがいかにも亜熱帯の島という風景を見せている。

ぼくと少年は、村落のはずれにある「渡嘉」という民宿に泊まることにした。西表港から、少し距離はあったが、島の様子を見物がてら、歩いて行くことにした。

幹線らしい道路は、ほぼ舗装されていて、離島という感じはない。それでも、道傍には世界でも類を見ないヤエヤマヤシやニッパンヤシが長い葉を垂らして高く群生し、その間をウンシユンモタマやハブカブラが樹木にからみついて茂っている。

三十分ほど歩いた所に人だかりができていた。クルマが止まって、住民らしい人が何やら話し合っている。

「交通事故らしいですね!」

少年が道の群がりに駆け寄った。

「こんな最果ての島にも交通事故があるんですね!」

だが、事故は、既に処理され、別のクルマ(救急車?)も立ち去った後だった。

「ケガの方は、だいじょうぶだったのですか?」

海里が心配して赤ん坊を抱いた母親らしい人に聞いた。

「それが、亡くなったんですよ。かわいそうに!」

その人は涙をこらえながら、いかにも悲しそうに目頭をおさえた。

「こんな道路にまで出てくるから、いけないんだよ!」字が読めないんだから、もつとヤマネコ同士で注意し合えないものかね!」

「ヤマネコ?」

海里とぼくは顔を見合わせた。事の次第を聞くと、ヤマネコの交通事故死であった。食物の獲物を追って、

道路に跳び出し

てきたヤマネコがクルマにひかれたらしい。

いま、西表島で時々発生するヤマネコの「事故」

には、現場検証が行なわれ、死亡した場合、遺体は丁寧に火葬場に運ばれ、翌日の地元新聞に死亡記事が載るといふ。西表島の人々のイリオモテヤマネコに対する愛情や配慮は、人間社会と全く同じといえる。

「ヤマネコに対する思いやりが、行き届いていますね!」

少年も、ひどく感動している。この事故で、かなり時間が遅れて民宿に着いたのは正午近くだった。

海里は、養育院生活での習慣なのか、部屋に入ると、すぐ机に向かった。自己流のノートを見開きに、色マジックで、午前、午後、夜間の三段に区切り、天候、温度、雲の形、食事の献立、買い物などを書き込んだ。今ももう「道路でヤマネコが交通事故死」「民宿の前をへびが横切った」等と書いている。持ってきた本も『詳細・日本地理・沖縄編』『日本動物図鑑』『植物事典』『気象年鑑二〇一一』と徹底している。

海里の真剣な熱意にあおられて、ぼくは、早くヤマネコに会いたくなつた。すると、胸が高鳴って、もう部屋でじつとしていられなくなった。

「おじさん、ちよつとそこらを散歩してくるからね!」

「どこへ行くんですか?」

「ヤマネコに会いたくなつてね。イヌも歩けばヤマネコに当たるってこともあるしね!」

「だめですよ、おじさん。ヤマネコは夜行性で夕方から活動を開始するんですよ。それに、警戒心が強いから、昼間はめつたに姿を見せませんよ!」

少年の強い口調に、ぼくは、あきらめることにして、履き替えた靴を脱いだ。



ぼくが外出をやめたのを見届けると、少年は「動物図鑑」を改めてぼくに見せた。

イリオモテヤマネコ

食肉目ネコ科の哺乳類。学名 Felis iriomotensis。イエネコよりやや大型で、頭胴の長さ五〇センチ〜六〇センチ。尾長二三センチ〜二四センチ。体重三キロ〜五キロ。暗褐色の地色に縦列の黒斑がある。頭骨などに原始的な特徴が見られる。沖縄県西表島だけに生息。普段は単独で森林内で暮らし、樹洞や岩穴を休息場所とする。一九六五昭和四〇年に発見。特別天然記念物。

ヤマネコは、夕方から活動するといふから、まだ時間がある。自分の取材ノートを整理した後、二三通の手紙を書き、海ブドウをサカナにアワモリを飲んでみると、海里があら、出かけよう!」

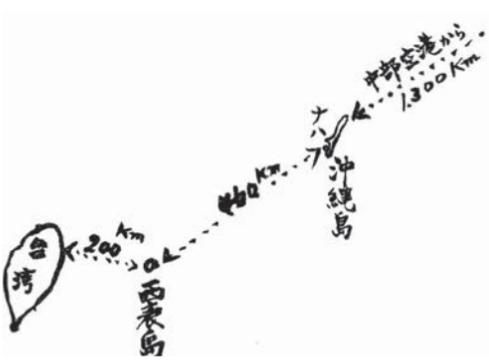
ぼくは、また登山靴に履き替えるど、あわてて海里の後を追った。

初めての西表島であるはずなのに、海里は地図を見ることもなく、どんどん先に進んでいく。(つづく)

●カット 牧 富也

《筆者紹介》

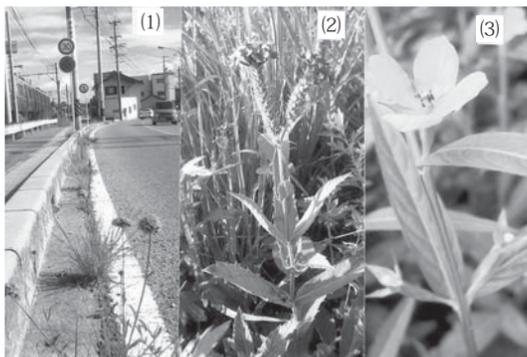
ほりお・こうへい。作家、「日本学術出版」代表。名古屋大学研究室修了。元愛知淑徳大学文学部教授。著書多数。現住所、名古屋南区元桜田町四一五五。



知多の動植物雑記(二七七)

原 穰

十月には寒露を迎え、涼しき最高かな。野に咲く花もそろそろ終りだが、夏の猛暑にもめげず道端に咲く花のたくましく驚き。



たくましく生きる帰化植物

(1)はヤナギハナガサで、南アメリカ原産の帰化植物。東海地方へは第二次世界大戦後に入ってきたとか。茎の先に紫色の小さな五...

弁の花を密につけ、全体は丸くて可愛い花である。写真の場所は名鉄上野駅南の道路端。草丈は五十センチ程で可愛い。これもコンクリートの透き間に生えたからで、草地なら優に一尺は越える。事実、内海中学校東の草地では、四十センチ程のもの、四、五十本も群がり咲いていて驚く。

ヤナギハナガサに比べ、花の穂が長く、先端部の花も少ないので、可愛さはちょっとかな。そして手に取れば、茎は四角形でざらつき、葉にも鋭い鋸歯があり、何かいかつい感じ。

見たのは富貴新川中流部の道路端。やせ地のためか草丈は五十センチ程。本来なら一尺位になるといふ。

工房&ギヤラー「ぼたる子」 小池 正さん 60代になった今でも笑顔が素敵で、変わりなく素敵な笑顔であり続ける小池さんは、今まで丁寧な働きを続けてきた年輪がある。

た小池さんには、焦りや焦りを乗り越える力強さがあったから、そして「ぼたる子」の魅力を開花させる自信も少しだけあったから。ギヤラー内の皆を迎え入れて、小池さんの作るお地藏さんがお返しをしてくれる。おちやらけて金太郎お地藏さん、桃太郎お地藏さんを見てくれた。どのお地藏さんも、おちやらけて金太郎お地藏さん、桃太郎お地藏さんを見てくれた。どのお地藏さんも、おちやらけて金太郎お地藏さん、桃太郎お地藏さんを見てくれた。どのお地藏さんも、おちやらけて金太郎お地藏さん、桃太郎お地藏さんを見てくれた。

(2)はアレチハナガサ。これも南アメリカ原産の帰化植物。茎の先に、分岐した長さ二〜三センチの花穂をつけ、その先に淡紫色の花びら五枚の小さな花を六個ほどつける。

事実、私が確認したのは武豊町富貴字鎮守の丘陵地の田んぼの縁と、武豊の堀川上流部の田んぼの片隅。雑草の中に黄色い花を見つけ、タガリシカなどと思って近づけば全く違ふ。花は黄色で四弁。葉は細長く先は尾状に広がる。ナニコレ?と図鑑で確認すれば、ヒレタゴボウだつて!

あなたの心にひとときの安らぎが届いたらうれしいです。ありがとうございます。書かれています。私はこの言葉にホッとしました。こうして優しさに包まれて、本当に心が満たされてしまふ。満たされていく感じがする。訪ねてきた人は旅の記念に、自分の身に代わりにお地藏さんを購入して、また数組のカップルが引出物にと大量に注文したという。やきもの散歩道の登壇前に「ぼたる子」をオープンして9年を迎える。平成生まれのぼたる子なのに、どこか昭和の匂いがし、懐かしさがある。登壇前ということで、多くの人が集まってくる。夏には店先でビザを焼いたり、手打ちうどんを打ったり、楽しいイベントを開いた。二度、三度訪ねて来ると、自分の最大の喜びは多くの人に会えること。自分では経験しなかった体験できなかった人たちの人生に寄り添えることだ。多くの人が旅の記念に、自分の身に代わりにお地藏さんを購入して、また数組のカップルが引出物にと大量に注文したという。

工房&ギヤラー「ぼたる子」 常滑市栄町6-1-40 TEL/FAX 0569-360680 (赤井 伸衣)

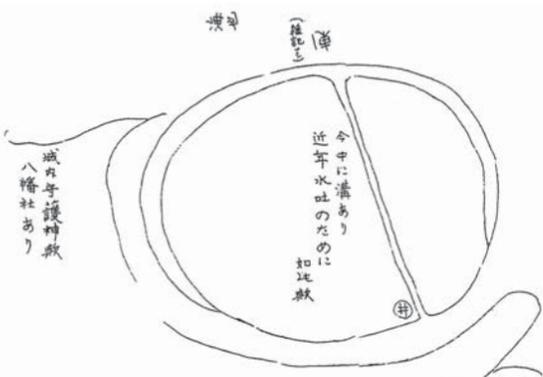
町の考古学

武豊町長尾城

(百六十八)

奥川 弘 成

遺跡



長尾城

およそ鎌倉時代に長尾の地に移り住んだと伝えられている岩田氏は、この棟札以外に、武雄神社の宝物に、永享九年(一四三七)の在銘のある御厨子に「根豆志社東条岩田景俊の名を残した」といわれます。

その後、享徳三年(一四五四)の醍醐寺文書に岩田氏が現れます。「根豆志社 岩田入道請文 正文 享徳三 八 廿八」

畏申上候 源秋子共并親類等、他人之被管成事、不可有候。御領中人として可致奉公候。殊に喜久寿殿の御殿人として、不可存緩急候。子々孫々可為此分候。万一代末代背此旨者、堅可預御罪科候。為後証文状如件、享徳三年八月廿八日 岩田弾正入道 源秋(花押) (愛知県史料編9より)

これは、根豆志社の岩田源秋が子や親類とともに喜久寿殿の御殿人として奉公することを誓約するもので、応仁の乱が起る十三年前のことです。岩田氏が喜久寿殿とされる有力者に仕え長尾郷を治めていたように、岩田三郎左衛門入道妙玄が隣ムラの榎原や垂水を治めていました。それは、永享四年

(一四三三)の「御前落居日記」に見ることが出来ます。そこには、「岩田三郎左衛門入道妙玄申地蔵院跡領尾張国根豆志社西方内垂水・榎原郷事」とあります。根豆志社が東方と西方に分かれて、そして長尾郷や垂水郷、榎原郷とあるように、いくつものムラで構成され、それぞれに、在地の土豪がさまざまなかけひきをして知行していることが分かります。この一五世紀、応仁の乱以前は、一色氏が知多郡守護となつてたころです。岩田氏が一色氏と同様に足利一門で本拠は三河であるのに対し、岩田氏は、在地の土豪として根をおろしていたようです。

半島南部の戸田が勢力を強めていました。長尾郷を治めた岩田氏は、城を構えることになりました。その築造がいつであったかは、分かりませんが、近年、武雄神社に残されている古文書などを愛知県史編纂室が調査して、いま、それによれば、長尾城主と記した棟札が確認されました。

奉再建長尾天神武運長久祈 天文九年(一五四〇)庚子十一月尾州智多郡根豆志社長尾郷城主岩田左京亮藤原光秋 大工青木口

奉修造長尾天守寺守護 弘治二年(一五五〇)丙辰正月尾州智多郡根豆志社長尾郷城主岩田左京亮藤原光秋 大工青木口

一色氏が立ち退くと、今川、織田、松平を背後として、大野の佐治や緒川の水野、

若竹俳壇

二輪車にリヤカー引かせ秋の暮人去りし急に広がる夏座敷裏庭の雑木に点る烏瓜夕風の心地よろしや赤蜻蛉御捻りの飛び交ふ芝居夏惜しむ故郷に想いをよせて盆の月秋の蚊にひそと耳元囁かれ喜べば鈴虫しきり鈴鳴らす鯊釣りに楽ししみ多い夕の膳新涼や重ね着ルックが闊歩する虫の声ひとりの夜となればこそ登校日蝉より高き子等の声特急の走り抜けるや八月尽今生の命を惜しむ法師蟬亡きがらを土に還して夕月夜楕円形抱えるに良しこの西瓜結び目をほぐす指先秋の風寝ながら窓にさしこむ月の色茶器の街陶都常滑秋の色大津波防災身にしむ九月かな軒下にあまりに近し虫時雨御つとめの声かき消して蝉しぐれ写真館看板大きく七五三古田扇風に預けし昼寝かな十五夜のおろろくと鳴くこおろぎよ

河瀬四子 藤井文月 富田悦子 林京子 江端久恵 杉江夕工 小島光彩 村田政子 関里美 齊藤浩美 塚本千鶴 谷川と志江 加藤久子 杉江京衣子 荒川達雄 村井範子 竹内ユミ子 渡辺民子 山中博子 都築信子 柴山艶子 伊奈庄山 中村洋子

ちやほげなを作ります。材料費一個百円。ハロウワックスをつくろう。二日(土)三日(日)午前九時午後四時半。内容 ビールや酎酒牛乳クッキーを作ります。材料費 各五百円。ちやほげなを作ります。材料費 各五百円。ちやほげなを作ります。材料費 各五百円。

ちやほげなを作ります。材料費 各五百円。ちやほげなを作ります。材料費 各五百円。ちやほげなを作ります。材料費 各五百円。

社会のトレンドをつかむ 日経新聞活用術 11月18日(金) 開場18:30開演19:00 会場 雁宿ホール

陶芸サロン陶美園 おもしろ布の楽しい装い展 中根由美子染色作品展(10月17日〜19日) ギヤラーセリカ展(10月17日)

